卒業生に贈る言葉

卒業生に贈る言葉

上野直蔵

ご卒業おめでとうございます。

皆さんは今日まで、学校というある意味ではミクロの世界で、すべて自己中心――自己の学問や自己の人間形成を主たる関心として――ずいぶん甘やかされて青春時代を過ごしてこられましたが、これからは目も眩むような広い世界の中で、極めて多岐にわたる人間関係の中に自己を設定しなければならないのです。そしてその世界は、わずかの例外を除けば、ほとんど、利益社会として、個人の利害を容赦なく捨ててゆくことでしょう。こういう社会において、いかに自己を確立し、しかも状況との有機的関係を保全してゆくか、なかなかもちまして難しいことでありましょう。昨年の卒業生にも申しましたが、精神の柔軟性が要求される所以であります。

精神の柔軟性と申しましても、議論や葛藤を経ないで容易に妥協したり、人まえをつくろう要領一本で世をわたる、ということではございません。一口で申しますと、万事に立

体的な視点をもつように、ということであります。私たちは、当然のことでありますが、いつも自己中心の考え方から出発します。ということは、ものの見方が、自己側から、そして自己をとりまく状況から出発します。それはまず、「自分」、「今」、「ここ」、という視点にたつ、ということです。「今」というのはさしづめ現代のことでしょう。「ここ」と申しますのは自分の生活を営んでいる場所を核としたできるだけ狭い周辺部分のことでしょう。そういう状況の中に身をおく自分の人生観、哲学、信条、イデオロギー、そういうものを中心としてものごとの判断をして、行動に転ずる、ということであります。私たちが、現代に生をうけ、必然的にいずこかで居住したり、仕事をしたりしなければならないわけですから、これは当然のことでありましょう。ところが屢々この当然のことの中に陥し穴が潜んでいます。と申しますのは、いわゆる自分側からの視点というものは、対象が余りにも近すぎて、そして束の間にすぎて、容易に捉えられないのです。しかも現代への意識、すなわち、自己と現代社会との接点の模索ということは、私たちが現代人であるかぎり避けられないことでありましょう。皮肉なことでありますが、山に入る猟師、山を見ず、のたとえのように、われわれは現代という山の実体把握に苦しみ、精神を分裂させるのであります。いつの時代にも現象としてある現代人の苦悩というものは、そういうところから出て参ります。

思いきって、この自分側の視点を一時捨ててみてはどうでしょうか。たとえば「今」でないもの、「ここ」でないもの、「わたし」、でないものの精神構造に一度自分を託してみて、そこから自分側を眺めてみては……。「今」でないもの、といえば、さしずめ過去社会に自分の視点を据えてみる。それは歴史的視点となるでしょう。「ここ」でないもの、といえば、自分の地縁とはかけはなれた文明の社会に自分の視点を据えてみる。それは、時間的にも、空間的にも異質の社会に身を託することでありましょう。そうすると、そういう

自分を中心とした同質社会で当り前で通っていたようなことがらが、異質社会では、当り前ではない、というような事実にぶっかるでしょう。また逆の現象にも驚くことでしょう。そういう自分の文明の側からみれば、当り前でなさを構成するさまざまの要素の組みあわせがその異質社会に存在していて、その社会ではれいきとした合理性をもっている、ということに気がつくでありましょう。その時にその異質社会の文明を自分側の文明の尺度からだけで解釈し、裁断することが、いかに暴力であるかということにも気づくでありましょう。そしてその異質社会に身をおくことによって、その相違を認識し、自分と同質の社会が対照的に照しだされてくるでしょう。また、文明の異質性にもかかわらず厳として存在する共通の文化現象にも驚かされることでありましょう。遠まわりのようですが、現代の認識や、自分の地縁社会の認識、そしてさらには、自己の認識は、このように、自分の側とは異質な側の認識と相俟つことによって確立されるように思います。

自分の文明の側からの視点と異質な文明の側にたって自分の文明をふりかえる視点。この二つの視点から両文明の異質性と同質性、さらに両者の本質を同時に見抜くこともできるように思います。このような立体的な視点を広くは一国や世界の政治、経済にも、狭くは個人の人間関係にもたてることをもって、私は柔軟性な精神構造の確立、と申します。

同志社は立学以来、国際主義的な学風をもつ、といわれています。そういうことで自他ともに許しているようです。しかし、国際主義と申しますのは、必ずしもわれわれが欧米の言葉や事情に精進している、という事実のみを指すものではありますまい。単にそれのみならば、外交儀礼や社交の延長の域を出ないでありましょう。かつてはそういうものが世界的視野だ、と認定されたこともありました。明治以来の日本の国家的姿勢がそうであったのです。欧米先進国との文字通り国際的親善によって、一日も早くそれらの諸国の文明に追い付くべしとて、親善の相手国の立場よりはむしろ、自国の立場と利益にたつナシ

ョナルな見地が優先する国際主義であったようです。しかし、本当の世界人とは何か、それは単に、ヨーロッパや、アメリカのみならず、世界のどこの社会の問題についても等しく強い感受性と理解力をもつ人のことをいうのであります。現代の苦悩と申すものは、昨今では、一国や一地域、一民族にとどまるものではなく、世界的（グローバル）な規模でもって経験されております。世界とは、かつて中世においてそう認識されていたように、ヨーロッパのみを指すわけではありません。世界とは、もはや近代においてうけとめられていたように欧米を中心とした地域概念ではありません。世界とは、今や、まさに世界であり、およそ等しく理性をもち、喜怒哀楽をもち、生活をもつ人類の住まいする全地域を指すのであります。「等しく」と申しましたが、同時にまた、相互に異質の営みと精神をもつ人類の住まいする全地域でもあるのです。そういう世界の誰の、どういう民族の、どこの問題にも同じように理解力をもつ国際人、いや世界人たるためには、立体的な視点が必要だ、ということを申し上げたいのであります。

そういう視点こそ、われわれの現代における人間関係のヒズミを正してくれるでしょうし、広くは世界というものへのわれわれの認識のヒズミを克服させることに役立つでしょう。そしてそれは、自己のみならず、他者の視点から自己をも他をも見る、という意味で、究極には「愛」の精神にもつらなるものであるのです。自分の側の価値を異質な側の価値によって照らしだす。それは同時に両者の理解につらなるものです。

学窓を巣立たれて新たに社会人として現代をグローバルな規模のもとに生き抜いてゆかれる皆さんに、二つの視点を、と再度申し上げて、卒業生を贈る言葉としたいと存じます。

（同志社総長）